

大本営発表とミッドウェー海戦

相澤 淳

はじめに

1937年11月20日、日中戦争勃発後約4ヶ月を経て、大本営が設置された。これは、日本における3度目の大本営の設置であり、第1回目は日清戦争（1894-95）、第2回目は日露戦争（1904-05）での設置であった。この3回目の大本営では、それまでの2回と違い新しい組織がその中に設けられていた。それは、陸海軍それぞれに設けられた報道部であり、少将もしくは大佐の部長の下、それぞれ10数名の部員からなる組織であった。報道部の任務は、「戦争遂行に必要な対内、対外ならびに対敵国宣伝報道に関する計画および実施」¹で、この報道部の設置自体、日本の軍組織がメディアの重要性を認識し始めていた証拠といえよう。この中の宣伝課・新聞発表係が、国民に対する窓として、戦況とくにわが軍の行動に関する公表を担当しており、この公式発表が「大本営発表」であった。通常、この発表は、陸・海軍省の記者クラブで行われた。

太平洋戦争中（約45ヶ月間）、この大本営発表は、総計846回に上った²。その最初の発表第1号が、1941年12月8日午前6時の、「帝国陸海軍は 本8日未明 西太平洋において 米英軍と戦闘状態に入れり」というものであった。すなわち、大本営発表は、報道部設置の4年後の、太平洋戦争の勃発から始まっていたのである。そして、その開戦翌日の12月9日には、海軍報道部長談として次のような声明が発表された。「わが海軍の戦況報道に当り特に正確を期するため、あるいは作戦上の要求などのため、発表時期が若干遅れることもあると思うが、決して心配することなく、安心してわが報道を信頼していただきたい。」³

本稿では、こうしてはじまった海軍の大本営発表について、とくに開戦から6ヵ月後に海軍が初めて大敗を喫したミッドウェー海戦までの経緯を追い、この作戦と戦況報道との関連を考察するものである。

1 大本営発表の信頼性

開戦初頭の日本海軍の戦況については、とくに開戦第一撃となった真珠湾攻撃を例にあげると、海軍報道部長の声明の通り、正確を期するための慎重な発表がなされていた。海軍報道部が発表した真珠湾攻撃に関する戦況報道は、12月8日未明の攻撃開始から約9時

間半後の発表（午後1時）をはじめとして、18日までの10日間に4回にわたり発表された。そして、2回目の戦況報道（8日午後8時45分）の段階では、実際真珠湾に停泊していたアメリカ戦艦全部（8隻）に損害を与えていたにもかかわらず、アメリカの戦艦の損害数は、確認されたものとしてまだ6隻に抑えられていたのである。結局、この8隻の戦艦への損害（撃沈4隻、大破3隻など）は、4回目（12月18日）の戦況報道でようやく確定された。一方、この10日間の4回の報道で、一度は撃沈したとされたアメリカ航空母艦（空母）について、海軍は4回目の報道で、その発表（空母1隻沈没）が間違いであったことも確認していた。すなわち、このとき海軍は、空母という重要目標物に対する戦果を下方修正するほどの正確さを期していたのである⁴。

ところで、こうした大本営発表の正確さは、開戦から最初の6ヵ月間は維持されていたとこれまでの研究では指摘されている。そして、日本海軍がはじめて惨敗を喫したミッドウェー海戦（1942年6月5日）前後から、その正確さが次第に失われていった、というのが定説となっている⁵。とくに、ミッドウェー海戦では、日本側は空母4隻を失う損害（沈没）を出していたにもかかわらず、それに関する大本営発表で「1隻沈没、1隻大破」と半分以下にその損害が削られて発表されていた（1942年6月10日）。このとき、海軍報道部では、「国民に負けたという事実を知らせて、奮起を促す必要がある」との判断から、日本側の空母の損害について「2隻沈没、1隻大破、1隻小破」という、より真相に近い発表案が提案されていた。しかし、海軍作戦部の「国民の士気と戦意の喪失を避ける」という強い反対から、上記の「1隻沈没、1隻大破」が実際に発表された⁶。同時に発表されたアメリカ側に与えた損害については「空母2隻沈没」（実際は1隻沈没）とされていたから、これは国民にとっては「日本側がやや有利」、すなわち、「日本は負けなかった」という情報が流されたことに等しかった。

こうした大本営発表における日本側の損害の隠蔽およびアメリカ側の損害の誇張は、その後太平洋戦争が続く中で、ますます大きくなっていった。日本国民は、ミッドウェー海戦以降ほぼ一方的に日本側の戦況が悪化していった状況にもかかわらず、勝利の報道のみを聞いていくということになるのである。そして、そうした「見せかけの勝利報道」の最大のものの一つが、1944年10月の台湾沖航空戦についての大本営発表であった。この戦況報道では、日本の航空部隊が19隻のアメリカ空母を撃沈もしくは破壊したと発表された。これは、対戦したアメリカの空母部隊（空母全17隻）を壊滅させたことを意味した。しかし、実際アメリカ側はこの戦いで1隻の空母も沈没しておらず、わずか2隻にかすり傷を負った程度に過ぎなかった。すなわち、この大本営発表は、ほぼ100パーセントの誇張報道で、その正確さ・慎重さは皆無といってよかった。しかも、海軍部内ではその後この発表内容の誤りに気づき、アメリカ空母の損害もせいぜい4隻が限界であったことを悟るが、これ

に関しての大本営発表の訂正はなされなかった。そればかりか、「アメリカ空母部隊壊滅」は誤った情報であることが、陸軍はおろか海軍最上層部にすら伝えられなかったのである。その結果、陸軍はその後、最大の決戦場としていたフィリピン作戦で、大本営発表のままの「アメリカ空母部隊壊滅」の情報の下、大きな作戦変更を行い、重大な失敗を犯していくのである。すなわち、大本営発表が日本の戦争指導を狂わせていたのである⁷。

この台湾沖航空戦における大勝利の大本営発表は、国民の戦意も大きく高揚させた。それは、日露戦争における日本の勝利を決定付けた日本海海戦での勝利の報道に匹敵する士気の盛り上がりといってもよかった。しかし、その情報は誇張に満ちた全くの誤情報であり、こうした戦争末期の大本営発表の実態が戦後の日本で知れ渡り、「大本営発表」は「ウソ」の代名詞と化していくのである。ただし、前述した通り、この大本営発表も戦争初期の段階では、その正確さが保たれており、その誤差も戦争末期の10隻単位の誤差とは違い、せいぜいが1～2隻程度の誤差であった。そして、この戦争初期のわずかな誤差は、戦況報道では避けられない程度のものであったといえよう。しかし、ミッドウェー海戦以前の太平洋における、アメリカ空母が全部で5隻しか存在していなかった時期の状況では、この1～2隻の誤差も、決して小さなものではなかったのである。

2 ミッドウェー海戦までの大本営発表

1941年12月初旬の太平洋戦争の勃発から約5ヶ月間、日本軍は東南アジア地域などの重要資源地帯を占領する第一段作戦を成功裡に終了した。そして、日本海軍の連合艦隊は次の第二段作戦に向けて、将来のハワイ攻略の前提ともなるミッドウェー島攻略作戦を計画した。同時にアリューシャン列島攻略をも伴うこのミッドウェー作戦には、連合艦隊の大部分の兵力が投入されることになっていた。しかし、その実働兵力は、なんと言っても真珠湾攻撃以来、西太平洋からインド洋まで暴れまわっていた空母部隊であった。

太平洋戦争において、日・米の空母部隊がそれぞれの主力兵力であったことは、とくに説明する必要はないであろう。この戦争では広い太平洋における制海権の有無が勝敗を決していたことは明らかであり、それを担っていたのが空母部隊に他ならなかったのである。開戦初頭からこの空母の重要性を認識していた日本海軍は、真珠湾攻撃においてもアメリカ空母を重要目標としていたが、たまたま出航中であった空母部隊は難を逃れた。そして、海戦での主役の座を急速に失いつつあった戦艦部隊のみを、日本は真珠湾で撃沈・破壊していたのである。そうして撃ち漏らしたアメリカの空母部隊は、その後日本海軍にとって不安の種となっていた。そして、その不安が現実と化したのが1942年4月中旬のアメリカ空母から飛び立ったドーリットル爆撃部隊の東京空襲であった。これ以降、日本海軍は

なんとしてもアメリカの空母部隊を捕捉・撃滅する必要をさらに痛感した。計画中のミッドウェー作戦計画は「アメリカ空母の日本本土への接近を困難にし、さらにこの作戦を契機としてアメリカ空母を捕捉撃滅する」ためにも重要となり、その作戦発動の時期も 1942 年 6 月初旬に急がれた⁸。

こうして改めてミッドウェー作戦における日本海軍の重要目標となったアメリカ空母であったが、実は、ミッドウェー作戦前の段階で大本営発表により報道されたアメリカ側の損害を総計すると、すでに 4 隻ものアメリカ空母が沈没していたことになっていた（1 隻は未確認だったが）。以下が、その一連の大本営発表である。

(日) 1942 年 1 月 14 日午後 3 時発表

帝国潜水艦は 12 日夕刻ハワイ西方洋上において米国太平洋艦隊所属航空母艦「レキシントン」型 1 隻を雷撃・・・同艦は沈没せること確実なるものと認む

(月) 1942 年 2 月 26 日午後 4 時 45 分発表

帝国海軍航空部隊は 2 月 21 日ニューギニア島北東方数百哩の洋上に航空母艦を含む有力なる敵部隊を発見・・・敵航空母艦を大破、大火災を生ぜしめ・・・その被害状況等より察し撃沈せられたるものと認めらるるも、その終焉まで見届くるに至らざりしを以て沈没確実ならず

(火) 1942 年 5 月 12 日午後 4 時 30 分発表

5 月 7 日、8 日珊瑚海海戦における総合戦果左の如し

1 艦艇=米空母サラトガ型 1 隻撃沈、米空母ヨークタウン型 1 隻撃沈・・・⁹

この日本の大本営発表の数値がもし正しければ、この時までにはアメリカが太平洋に展開していた空母は全部で 5 隻であったから、ミッドウェー海戦にはアメリカ空母は 1 隻しか参加できなかったことになる。しかし、歴史が示す通り、実際ミッドウェー沖では 3 隻のアメリカ空母が日本の空母部隊を待ち伏せていたのである。

3 大本営発表とミッドウェー海戦での敗戦

大本営発表の戦況報道の内容は大本営の陸海軍それぞれの作戦部が決定しており、報道部はそれを外に伝えるだけのスピーカー的存在に近かった¹⁰。ただし、ミッドウェー海戦より前の段階では、作戦部には、戦況報道を誇張する、すなわち、敵側の損害を過大とし、味方の損害を過小とする、という傾向も、またその必要もまだほとんどなかったから、そのときまでの大本営発表は日本軍の戦況判断をほぼそのまま示していたと考えられる。もちろん、それは発表が正直であったということで、正確であったかどうかということは別の問題であった。そして、ミッドウェー海戦までのアメリカ空母 4 隻沈没という発表も確

かに正確ではなかった。それでは、そこにあった誤差とはどの程度のものだったのか。

結論から言えば、ミッドウェー海戦までに沈んでいたアメリカ空母はわずか1隻のみであり、それは先に示した大本営発表の(火)のサラトガ型1隻（実際はレキシントン）撃沈のことであった。すなわち、4隻沈没は1隻沈没の誤りで3隻もの誤差が生じていたのである。しかも、この3隻という数字は、ミッドウェー海戦に参加したアメリカ空母の総数であったということを考えると、致命的な誤差であったということもできるのである。

もちろん、日本側、とくに作戦部隊である南雲空母部隊が、アメリカの空母がすでに1隻も存在していないと考えていたわけでは決してなかった。しかしながら、南雲部隊は、いったいアメリカの空母が何隻存在し、またそれらがはたしてミッドウェー沖に現れるのか否かについて、最後まで分かっていなかったのも事実であった。それでは、それまでのアメリカ空母の状況は実際どうなっていたのか。先の日本の大本営発表と照らし合わせて、以下、分析してみる。

まず、アメリカ空母撃沈の最初の大本営発表は、1941年12月の真珠湾攻撃時に1隻沈没と発表されていたが、それがすぐに間違いであったことが判明し、沈没が取り消されていたことは前に記した。そして、次の空母撃沈の大本営発表が、(日)の1942年1月の日本潜水艦による空母レキシントン撃沈であった。ただし、このとき実際攻撃を受けたのは同型艦サラトガであり、しかも沈没には至ることのない魚雷1本の命中であった。それでもこのサラトガは修理のためその後アメリカ西海岸に戻ったため、ミッドウェー海戦の参加には間に合っていなかった。その次の(月)の1942年2月の空母撃沈は、いわゆる虚報であり、ここで損傷していたアメリカ空母はなかった。ただ、日本側もこの(月)の大本営発表に関しては「未確認」とはしていた。そして、(火)の珊瑚海海戦（1942年5月）についての大本営発表では、空母2隻撃沈のうち、1隻（レキシントン）は確かに沈没していたが、もう1隻（ヨークタウン）は沈没には至らず大破であった。とはいっても、通常ならば、1ヵ月後のミッドウェー海戦にこのヨークタウンは間に合うはずはなかったのであるが、暗号解読により日本のミッドウェー攻撃を知っていたアメリカ側は、これに応急措置を施して何とかミッドウェー海戦に間に合わせていたのである。

以上、アメリカ側空母の状況をまとめると、ミッドウェー海戦までに太平洋に展開した全5隻の空母中、(日)の沈没1隻は沈没ではなかったがミッドウェー海戦には間に合わず、(月)の沈没1隻は発表の間違いであり、(火)の沈没2隻中1隻は大破であったが応急修理の上ミッドウェー海戦に参加、そして、この4隻沈没という日本の発表によってもまだ残っていた1隻もミッドウェー海戦に参加していた、という計算になる。しかも、この3隻は、暗号解読により日本がミッドウェーに攻撃してくることを承知で待ち伏せしており、さらにミッドウェー島自体もその飛行場が不沈空母の役割を果たしていたのである。

一方、日本側の作戦部隊であった南雲空母部隊は、アメリカ空母の存在をどのようにとらえていたのであろうか。まず、事実関係として、珊瑚海海戦後の5月15日、日本の偵察機が南太平洋で2隻のアメリカ空母を発見しており、すなわちミッドウェー海戦を前に2隻のアメリカ空母が健在であることは承知していた。しかし、それ以外の3隻については、ほぼ沈没したものと見ていた。真珠湾攻撃以来の南雲部隊の航空参謀であった源田実も、飛行隊長であった淵田美津雄も、(日)と(火)のサラトガ、レキシントン、ヨークタウンの沈没をほぼ認めて、そこから上記の南太平洋における2隻の空母の存在を逆算していた位なのである¹¹。すなわち、気分的にはすでに半分以上のアメリカ空母は沈没しており、あとは残りの2隻が残るのみ、という思いだったといえようか。しかも、日本側は自分の暗号が解読されてアメリカ空母がミッドウェーで待ち伏せしているなどとは全く考えていなかった。むしろ、ミッドウェー作戦の目的には、アメリカの空母部隊を誘い出しこれを捕捉撃滅するという意図があったから、アメリカの空母が反撃してくることを期待するという雰囲気すらあったのである。そうすれば、今度こそアメリカの空母部隊を壊滅できる、という絶対的自信(過信)を南雲部隊はもっていたのである¹²。しかし、その結果は、日本の空母4隻の全滅(沈没)に対し、アメリカ側はただ1隻のみの喪失(沈没)であった。

ミッドウェー海戦における日本の敗戦の原因について、やはり日本側の油断・過信を挙げないわけにはいかない。それは作戦準備から作戦行動間のすべてにわたるものであったと言って過言ではない。それではどうしてそうした油断・過信が起こっていたのか。それは、開戦以来約半年間、海軍については真珠湾攻撃に始まる連戦・連勝による驕りが引き起こしていたものであった。真珠湾攻撃を終えた南雲部隊が日本に帰ってきたとき、山本五十六連合艦隊司令長官は南雲部隊の将兵に対して「勝って兜の緒を締めよ」と訓示して、そうした勝利による驕りを戒めようとしていた。しかし、その山本ですら、ミッドウェー作戦立案時の計画の杜撰さ、その慎重を欠く態度を、指摘しないわけにはいかないのである。そして、そうした油断・過信を引き起こした連戦・連勝ぶりを報道していたのがまさに大本営発表だったのである。

ただし、大本営発表の如何にかかわらず、ミッドウェー海戦に参加した日本の作戦部隊(含南雲部隊)は、敵空母が2隻は健在であることを承知しており、それに大本営発表の(火)で沈没と報じられていたヨークタウンが加わってアメリカ空母は3隻となっていた。それゆえ、大本営発表の誤差も、結果的に1隻であった見ることもできる。それでも、この1隻の誤差の影響は、すでに4隻沈めたつもりでの場合と、1隻しか沈んでいない実状下とでは、そのもつ意味は大きく違っていたと思われる。前者の状況での戦いは残ったアメリカ空母の残敵掃討(後始末)を意味したであろうし、後者では同等の戦力での空母同士の決戦を意味したはずだからである。そして、南雲部隊のミッドウェー作戦に臨む雰囲気

は、まさに前者であった。そうした油断と過信は、司令長官から水兵に至るまで変わりがなかった¹³。

むすび

大本営報道部の業務規定では、大本営発表によって「我軍民の士気を鼓舞し敵の戦意を失墜せしむるものとす」¹⁴との目的が記されていた。そして、真珠湾攻撃以来の海軍の連戦・連勝は、前奏曲である「軍艦マーチ」のリズムと共に大本営発表で華々しい表現によって報道され、それは海軍自身の士気も大きく鼓舞した。すでに、開戦2ヵ月後の段階で、大本営発表によるとアメリカ艦隊もイギリス艦隊も、さらにオランダ艦隊も「全滅」したようになっていたのである。しかしながら、真珠湾で「全滅」したと報じられたアメリカ太平洋艦隊も、実はその攻撃で失った戦闘艦艇は、全体の1割に過ぎなかった¹⁵。こうした状況のなかで、大本営発表はさらに日本海軍の連戦・連勝を伝え、そのなかにアメリカ空母の合計4隻にもものぼる撃沈発表も入っていたのである。したがって、大本営発表からの印象では太平洋にはもうアメリカの主要艦艇はほとんどいないはずであった。そして、そうした情報からの油断とそれまでの勝利への過信が、ミッドウェー海戦までに日本海軍全体を包み込んでいた。大本営発表は、「士気の鼓舞」を通り越して、海軍の「過信と油断」をあおっていたのである。

¹ 『現代史資料 (37) 大本営』(みすず書房、1967年) 368頁。

² 富永謙吾『大本営発表の真相史』(自由国民社、1970年) 12頁。

³ 同上、11-12頁。

⁴ 辻泰明・NHK取材班『幻の大戦果-大本営発表の真相-』(NHK出版、2002年) 23-30頁。富永謙吾『大本営発表海軍篇』(青潮社、1952年) 70-75頁。

⁵ 富永『大本営発表の真相史』13頁。辻・NHK『幻の大戦果』30-35頁。

⁶ 『現代史資料月報』(みすず書房、1967年3月) 2頁。

⁷ 辻・NHK『幻の大戦果』10-20、141-218頁。

⁸ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 ミッドウェー海戦』(朝雲新聞社、1971年) 57-86頁。

⁹ 富永『大本営発表の真相史』64-65、73、269、282頁。

¹⁰ 平櫛孝『大本営報道部』(図書出版社、1980年) 14、32頁。

¹¹ 源田實『海軍航空隊始末記』(文春文庫、1996年) 144頁。淵田美津雄・奥宮正武『ミッドウェー』(PHP文庫、1999年) 52頁。

¹² 『戦史叢書 ミッドウェー海戦』126-127頁。淵田・奥宮『ミッドウェー』55-57頁。

¹³ 牧島貞一『統・炎の海』(光人社NF文庫、2002年) 55頁。金沢秀利『空母雷撃隊』(光人社、2002年) 162頁。

¹⁴ 『現代史資料 (37)』370頁。

¹⁵ 富永『大本営発表海軍篇』77頁。

(防衛研究所戦史部主任研究官)